

---

# 妖精ブロッコリー

メイコ&ゆうなっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖精ブロッコリー

### 【Nコード】

N9694X

### 【作者名】

メイコ&ゆうなっち

### 【あらすじ】

野菜嫌いな男の子ジョニーと、野菜大好きな女の子ルーシーと、妖精ブロッコリーの物語です。

## 第1話 ルーシーの絶交宣言！（前書き）

中二女子二人で作った小説です。

## 第1話 ルーシーの絶交宣言！

むかしむかしあるところに、ジヨニーという男の子がいました。ジヨニーは、野菜が嫌いです。幼馴染の女の子ルーシーは野菜大好きある日の学校の帰り、ルーシーはうきうき顔でこう言う。

「ねえ、ジヨニー。今度の土曜日野菜摘みに行かない？」

（うわあああ、せつかくのルーシーのお誘いなのに・・・野菜を見るのもいやなんだ。）

「ねえ、野菜摘みよりも魚釣りとかの方が・・・。」

そのときルーシーの何かが切れた音がした。

「・・・？ルーシー？」

「ジヨニーなんて大嫌い。野菜好きになるまで・・・絶交よ！」

（絶交よ！絶交よ！絶交よ！・・・そ、そんな）

ルーシーは怒ってルーシービームを放ち、走って行ってしまった。

（このままじゃルーシーはmeの他に仲の良いboy friendを作ってしまう・・・どうしよう。）

「その願い叶えてあげよう」

そこにいたのはプロッコリーだった。

「だ、誰・・・？ていうか願ってないし・・・」

「・・・まあ、君が何かに困っていることは確かだろ？さあその悩みを言ってごらん！」

い、いやその前にあなたは誰？」

「フフフ・・・それを良く聞いてくれたな・・・オレの名は・・・妖精プロッコリーだ！」

「へー、my nemesis ジヨニー！君って妖精のイメージと違うね。」

「・・・オレ様は偉大なる妖精。イメージと違って何が悪い！」

「急にきれたよ！何なの？こいつ・・・。」

（しかも何気に態度もでかくなってるし・・・）

第1話 ルーシーの絶交宣言！（後書き）

次回も読んでください。

## 第2話    フロッコリー弁（前書き）

ルーシーが出てきません。途中モゴ抜き言葉が出てきます！

## 第2話    ブロッコリー弁

次の日の朝。

「おいジョニー朝だぞー起きろー」

「んだよ、っせーなー」

ジョニーは不良化してしまった。髪の上らへんは緑、残りの部分は青という不思議な髪色だ。

「ジョニー、オレ達はブロッコリー仲間じゃないか！仲良くしようじゃないか！」

「髪の色はブロッコリーでもふくらんでねーし」

次の日の朝。

「おいジョニー朝やで起きいー」

「んだよ、っせーなー・・・てかなんで関西弁？」

「そんなことより、ルーシーに告白して来い」

「いや、ルーシー怒ってるから無理だよ。野菜好きにならないと。」

「じゃあ、まずブロッコリー食べてみな！ちよっと待ってて。」

30分後。

「ジョニー。できたべさ！」

「今度は何弁！？」

おそろおそろ妖精ブロッコリーの声のする方へ向かった。そこには、妖精ブロッコリーと得体の知れない緑のものがたくさんテーブルにのっていた。

「なにこれ？きもい」

「ブロッコリー料理だべさ。おいしいから食べてみんしゃい。」

「嫌だよ、気色っ」

「たべらっしゃい」

妖精ブロッコリーは無理やり口にブロッコリーの料理を入れた。

「モゴモゴ・・・今度モゴモゴ何弁モゴモゴ？」

「ブロッコリー弁」

「モゴモゴ・・・噓モゴモゴだモゴモゴろ・・・ていうかまっず！」

「まあまあルーシーに好かれるためなんだから・・・もつと食え」

また無理矢理口の中に入れた。

「モゴモゴまずいモゴモゴ」

「なんで？こんなにおいしいのに。」

妖精ブロッコリーは自分の口に料理を入れた。

「共食い！？」



## 第2話    プロッコーリ弁（後書き）

モゴ抜き言葉使えましたか？  
次話もみてください！

### 第3話 ルーシーの反省（前書き）

ジョニーが出てきません。

### 第3話 ルーシーの反省

一方、ルーシーは、反省していた。

「ちよつと言い過ぎちゃったかな・・・。」

（私も少し反省して、肉・魚が食べられるようになるう）

「その努力、私たちが手伝おう、私は猫缶の精だ。」

猫缶の精は猫缶の姿ではなく、猫のような姿だった。

「で、隣にいるのが、魚の精、肉の精だ。」

「つてめ肉の精、ひき肉にしたるか？」

「あんだとコラ魚の精。てめえは魚ソーセージにしてやろうか？」

「ああ？てめえはハムにしてやるよ。」

その様子を見ていた、猫缶の精と、ルーシーはポカンとしていた。

すると猫缶の精が止めに入った。

「君たちやめたまえ、子供の前でみつともないじゃないか。自分の歳分かって行動してよ、もうっ。」

すると肉の精、魚の精の順に言った。

「五千二百三十歳だ」

「五千三百二十六歳だ」

するとどや顔をした猫缶の精が言った。

「フッフ、私は一万歳だ。」

すると3人はルーシーの方を見てどや顔をした。ルーシーは切れ気味に言った。

「何？なんなの？あんたらしい歳してどや顔？」

するとルーシーはルーシービームを放った。三人ははもってこういつた。

「危なかった・・・。殺す気ですか？コノヤロー！」

「ゴホン・・・それはおいといて・・・私の努力手伝うって言ったわね？具体的に何するの？」

「それは、ブロッコリーの妖精に聞いてからじゃないと・・・。」

すると妖精たちは、ブロッコリーの妖精のところへ行ってしまった。

### 第3話 ルーシーの反省（後書き）

次話もみてください。

## 第4話 ただのおっさん（前書き）

かなり短いです。

## 第4話 ただのおっさん

妖精ブロッコリーの所へとんでいった三妖精は、しばらくして戻ってきた。

「あいつ、『ブーロボロボロボ！』としか言わねえ。」

「役立たずが武器もってボコリに行こうぜ。」

「おおー！」

そしてまた三妖精は妖精ブロッコリーの元へと向かった。

この日、妖精ブロッコリーのブロッコリー頭がもがれて

ただのおっさんになったのは言うまでもない・・・。

～おまけ～

その後妖精<sup>おっさん</sup>ブロッコリーがジョニーにこう言った。

「どうしよう・・・。このままじゃ・・・妖精カリフラワーか妖精おっさんになってしまふ・・・。」

「いやもうおっさんだろ？・・・てか妖精おっさんとおっさん何が違うんだよ!」



第4話 ただのおっさん（後書き）

おっさんブロッコリー！

第5話 ルーシーの感動！（前書き）

面白いよ！

## 第5話 ルーシーの感動！

妖精ブロッコリー（今は妖精カリフラワー）の頭をもいだ三妖精が戻って来た。

「ルーシーただいま」

「お帰り〜・・・ってあんた達何してきたの？」

「ルーシーの好きな野菜の収穫。」

と言いながら肉の精は妖精ブロッコリーの葉っぱの部分差し出した。

「この葉っぱと私達を混ぜて食べればルーシーもきつと肉&魚嫌い克服できる。」

「でも、そんなことしたらみんなが（私に食べられて）死んじゃう！猫は食べないけど・・・」

「最初に言っただろう？ルーシーの手伝いをするって。」

「いや、正確には『その努力、私たちが手伝おう』じゃなかった？」

「そんなことはどうでもいい！さあ調理を始めるぞ。」

「肉の精！魚の精！」

30分後。

「出来たぞ」

という猫缶の精の声と共にみんなの元に向かう。

そこには調理された妖精ブロッコリーの葉っぱと、肉の精と、魚の精がいた。

「さあ召し上げ！」

「で、でも・・・」

「ジョニーに告白するんだろ！？早く食べる！」

（告白するなんて言っただけ・・・）

「ごめん2人とも。絶対に肉と魚好きになる。」

と言いながら、ルーシーは料理を口に運んだ。

「おいしー！」

・・・という感動(?)な物語とは裏腹にジョニーのところでは死闘が行われていた。

「ぎゃー！妖精おっさんきもい！来んな！」

「ルーシーに告白すんなら早く俺を食え！」

第5話 ルーシーの感動！（後書き）

次話も見えてね！

## 第6話ブロッコリーにもぶたれたことないのに！

ルーシーは急いでジョニーの元に向かった。

（ジョニー、私、肉と魚食べられるようになったよ！）

その頃、ジョニーは・・・

「うわーやっぱ食べられない・・・」

「早く食べるよコノヤロー」

「ピンポン」

と、ルーシーが言った。

「あ、ルーシーだ！自分で『ピンポン』なんて言うのはルーシー  
しかない！」

「何！？まだ食べられない？」

「えっ、まだ何も言っていないんだけど・・・まあまだ食べられない  
けど」

（ルーシーって心読めるっけ？）

「ジョニーのバカッ」

するとルーシーはジョニーをぶった。（2回）

「ぶたれた！ブロッコリーにもぶたれたことないのに！」

「呼んだかね？」

「呼んでねーよコノヤロー」

「コノヤローじゃねーよコノヤロー！早く俺を食べるよコノヤロー」

「やだよ」

「ジョニーのバカッ」

と言いながらルーシーはルーシービームを放った。

「私は：肉の精と魚の精の命を犠牲にして肉と魚を食べたのよ！」

「ああ、さっき俺の頭をもいだ奴ら？」

「なのに・・・ジョニーは何の努力もしないで・・・」

「いや、それって俺に死ねって言ってるんですよね」

すると、いきなりドアが開いた。

そして三妖精が・・・

「誰か・・・」

「私達を・・・」

「呼んだかい？」

と言つて入ってきた。

そしたらルーシーが感動の涙を流して・・・

「生きていたのね・・・」

と言いながら感動のルーシービームを放った。

第6話ノロコリーにもぶたれたことないのに！（後書き）

次も見えてね。



## 第7話    おーい、みんなでブロッコリーを無視しようぜ！

「肉の精、魚の精・・・？」

「ていうか君たちの事呼んだ人なんていねーよ、今必要なのはこの俺、妖精<sup>おっさん</sup>ブロッコリーだ！」

「いやお前も必要ないし」

「『なんで自分のことを妖精<sup>おっさん</sup>って呼んでんだよ』ってツツコンでほしかった！」

「やあ、ルーシー。久しぶりだね「無視すんな！（by 妖ブロ）」肉と魚は好きになったかい？」

「え、ええ。でもそんなころより何で生きていたの？」

「いや、生きていたも何も、私たちは『死ぬ』なんていつてないぞ？」

「あ、あら・・・そうだったかしら」

「まあ、死なずに済んだんだからワケはどーでもいいじゃん」

「おお、この小説の主人公ジョニーくん、ルーシーに主人公取られかけてるぞ・・・」

「テメーが目立つことしねーからだろコノヤロー」

「だ・か・ら、俺を食えって言ってんだろうがコノヤロー」

「ジョニーとブロッコリーのバカッ」

と、またルーシーがジョニーをぶった。今回は妖精ブロッコリーにもびんたした。

「あんたら・・・まだ分かんないの！？自分の嫌いなものを克服することで友情が生まれるのよ！」

「いやそれはジョニーだけに言えよ。俺関係ないじゃん」

「「調理だ」」

と、後方から三妖精の声が聞こえてきた。

「ジョニーの好きな俺様 肉と」

「俺・魚と」

「ジョニーの嫌いな野菜を混ぜて食べやすくするんだ！お前の役目はそれだ！」

「・・・・・・ああ。」

第7話    おーい、みんなでフロッコリーを無視しようぜ！（後書き）

まだまだ続くよ？

第8話  
おい、今度はプロッコーが三妖精の意見無視したぞ！（前書き）

H  
A H  
A H  
A H  
A H  
A !

第8話      おい、今度はブロッコリーが三妖精の意見無視したぞ！

（前に俺が作ったブロッコリー料理は不評だったんだよな。もつとたくさん肉と魚を加えて色と味をなくそう・・・ていうか、俺って嫌われ者だな味も悪いし、形もきもい。色も最低。妖精界で『付き合いたい妖精ランキング』最下位だったし。やっぱり肉とか魚とか加えないと食べてもらえないのか・・・ん？さてよ、確か・・・）

「おい、おっさんブロッコリー、まだか？」

「おっさんブロッコリーって言うな！俺は一回妖精界に行つて来る。」

「え？」

「まってるよ、ジョニー。帰ってきたら、すっげーうまいブロッコリー料理食わせてやるからな！」

そのころ、三妖精とルーシーは縄跳びで遊んでいた。

「妖精ブロッコリーのブロッコリー、食べてあげましょ1こ、2こ、3こ・・・」

第8話    おい、今度はブロッコリーが三妖精の意見無視したぞ！（後書き）

まだまだ見てくれるよね？

第9話 美女の妖精（前書き）

H  
E  
  
H  
E  
  
H  
E  
H  
E  
H  
E  
!

## 第9話 美女の妖精

妖精界にて、妖精ブロッコリーは王女と会っていた。その王女というのも妖精で、美人の妖精だ。

「ふふふふふふふふ、いまさら何の用かしら」

実は、妖精ブロッコリーは王女の部下だった。でもあまりにも役立たずなので、リストラされてしまったのだ。

「お前の・・・育てている・・・甘いブロッコリーを俺にくれ」  
「誰がテメーなんかに渡すかしら」

「急に口悪くなった」

「じゃいいわつ。交換条件として、君ノ命ヲイタダクワ」

「命ってええー！ってなんでいきなり日本語苦手な外国人風なしやべり方！？」

「ワレワ、ウチュウ人ノ頂点ニ立ツテイル者。」

「いや何でいきなりそんな展開！？」

「命ト甘イブロッコリー両方欲シカッタラ、ワレヲ倒スガイイ！」

「てかもうこれ何の小説だよ・・・」



## 第9話 美女の妖精（後書き）

次回プロッコリーはどうゆう行動をするか・・・  
考えてみなされ！

第10話

カナリウマブロッコリー（前書き）

H  
A  
  
H  
A  
  
H  
A  
  
H  
A  
  
H  
A

## 第10話

## カナリウマブロッコリー

（くそ、甘いブロッコリーをGetするにはこいつを倒さなければ・  
・・）

「フフフフフフフ、今ノオ前デハワレヲ倒スコトハデキン！」

「私たちがいるわ！」

「ナニ！？」

「ジョ、ジョニー、ルーシー、猫缶、肉、魚！」

「俺達も加勢する。一人で手柄をあげようとすんなコノヤロー」

皆で飛びかかった瞬間妖精ブロッコリーのブロッコリーが突然光出した。

「ナンダト三千百十五年二度出ルトイウマ、マ、幻ノ『カナリウマブロッコリー』ガコイツノ頭二・・。」

「ち・・力がみなぎってくるワアアア」

第10話

カナリウマプロジェクト（後書き）

次見てね

第11話 24時間クッキング(前書き)

HE  
HE  
HE  
HE  
HE

## 第11話      24時間クッキング

「このブロッコリーを食べると野菜好きになれる気がする。」

「アタリマエダ幻ノブロッコリーナンダカラ」

「じゃあさっそく調理しよう。」

「ワレヲ無視スルダト!?!?!ウツ!」

「どうした王女」

「ウ・・・ワレハ、ガンデ余命1ヶ月ダッタダ。ソレヲ1ヶ月前ノ三時間前ニ宣告サレタ・・・」

「てことはあと三時間の命」

「ていうか忘れてたのかよ」

「フッフ・・・王女、心配するな、お前が死んだらお前も具としてジヨニーの料理に入れてやる。」

「ナンダト? ナンカ爆発シソウ・・・ウアアアア。」

王女は宇宙のちりとなり消えていった。

「あーあ、具入れられなくなっちゃった。ジヨニー、残念だったな」

「いや食いたくねーし」

「まあいい。帰って調理しよう」

そして皆はジヨニー家に帰っていった。

「妖精ブロッコリーの24時間クッキング」

「長!」

「ていうことだから、ルーシーと三妖精は一回帰っていいぞ。」

「はいはい。」

そして三妖精とルーシーが帰ってから十分後二人の顔がにやけた。

「作戦・・・」

「・・・成功。」

二人は王女がちりになるちよつと前にある作戦を立てていたのだ。作戦というのは、幻のブロッコリーは、三妖精とルーシーには食べさせないようにして二人だけで食べてしまおうというものだ。なの

で24時間クッキング というのは嘘で実は十分でできる簡単な料理なのだ。

そして十分後。

「できたぞ。俺の頭をもいで作ったサラダだ！」

「もいで盛りつけただけになんでそんな時間かかるの？」

「そんなことはどうでもいい！早く食べてみる！」

「・・・・・・」

第11話

24時間クッキング（後書き）

次話も見てください！



## 第12話 ジョニーの精とバカプロ王

「さあ早く食べる!」

「・・・やっぱり無理。食べたくないよ・・・」

「ジョニーのバカッ」

「なぜルーシー化!？」

「・・・食べ。」

プロッコリーを無理矢理口に入れられたジョニー。

最初らへんと同じ展開!？いや違う。

ジョニーは笑顔だ。

「とてもおいしい!」

「アタリマエダ『スゴクウマプロッコリー』ダカラナ」

「王女化!？」

2人は幻のプロッコリーを食らい尽くしてしまった。

そして次の日、ルーシーと三妖精がやってきた。

「何!？もう食べた!？」

「ジョニーのバカッ」

「全てはジョニーの精だいやジョニーの所為だ。」

「『ジョニーのバカヤロー!』」

「いや、漢字を間違えたお前らがバカだ」

うつうつ・・・

どこからか誰かの泣き声が聞こえてきた。

「何、泣いてんだ。プロッコリー」

「俺は、ジョニーに野菜を好きになってもらう為に来た。そして、

ジョニーは好きになった。だろ？」

「う、うん・・・」

「指名を果たした俺はたった今妖精界から『王女2代目になってほしい』って電話来たんだ・・・」

「妖精プロッコリーが王女になるの!？お前女!？」

「いや違うけど。とにかく・・・俺は・・・妖精界に・・・戻らなきゃ・・・もう・・・ジョニーとは・・・会えない・・・」

「俺ら三妖精は下っぱなので自由なのでーす」

「なら王女、じゃなかった王様になって、『王様は自由令』出せば？」

ルーシーは実はかなり頭がよくオール5なんて当たり前。

なので今のような発想はお茶の子さいさいなのだ。

「頭いいな・・・」

「ちなみに余談だがジョニーはルーシーの逆、ここまで言えば分かるよね？」

「てめえ猫缶の精、何ナレーターみたいな事言ってるんだよ。しかも何で俺の成績の悪さ知ってるの!？」

ジョニーは成績を親にも見せないのだ。

なので成績を知っているのは先生だけなのだ。

だから猫缶に成績を知られて、内心びっくりしすぎているのだ。

「ははは、手品師は客に種明かしをしてはいけないから教えられないなあ」

「手品で俺の成績が分かるわけないだろうが。」

「でもさあ、これじゃあルーシーと釣り合わないんじゃないかね？」

妖精ブロッコリー、次期の王が言った。

すると、ルーシーは顔を赤らめて、

「え、ジョニー、私のこと、好きだったの？」

「!?!」

ついに、長年の秘密が、バカプロ王によって解禁されてしまった。

「う・・・う・・・ブロッコリーのバカアア!?!」

ジョニーは走って家を出て行ってしまった。

「・・・ルーシー。お前の考えた『自由令』は出来ねえ。俺がこのままここに居れば、ずっとジョニーは甘えたままだ。」

「いやそれお前が言ったから傷ついたんだろ。」

「俺、ジョニーを追いかけてくる!」



### 第13話 バカプロ王にプロはなる？

妖精プロコッリーはジョニー捕獲に成功した。

「ぬおっプロッコリーごときに捕まった。ってかプロッコリーなのは風の如くはやい！」

「うおおおお！」

「もう走ってないのになるなキモい。」

「うおおおおお？」

「つつこみ待つな、しつこい！」

「うお！？うおうおうお！」

訳・うお！？「うお」しか言えなくなっただけ！

「だからつつこみ待つなっつの」

「うお！うおうおうおうお！」

訳・いや「うお」しか言えなくなっただけ！

「黙れバカプロ王。さっさと帰ってクソ政権してろ」

「うお！うお、うおうおお！うお、うおうお？」

訳・何！誰がバカプロ王だ！つか、クソ政権って？

「いい加減黙れ。早く離せ！もう俺たちは、友達じゃない！」

「うお。うお。うお。」

訳・友達じゃないならインストラクターになつてやる。

すると3妖精とルーシーがおいついた。

「な、なんだとプロッコリーお前、神の領域内で使われる『うお語』を使えるように！？でも人間界の言葉が使えなくなつて・・・ドンマイ。」

「でも、特訓すれば両方使えるように・・・」

「うおっうおっ！」

訳・分かった、がんばる！

「てか帰らないのかよ・・・」

「『うお語』じゃあ誰も通じないだろ。」

「うお、うお、うおうおお！」

訳・だから、もう少し世話になる。

「え？なんていつてるんだ？」

「うお・・・うおうおお。うおうおお？」

訳・あの・・・さっきはバラしてゴメン。この機会に告白すれば？

「だからなんて言ってるんだよーアハハ」

（うお・・・うおうおお？）

訳・ジョニー、許してくれるかな？

「必ずテメーにさっきの仕返しをしてやるから覚悟しな！このうお  
ブロ王！」

「うおうおお！うおうおお！うおうおおー！」

訳・かんちがいしないでー！かならず必ず人語使えるようになるか  
らね！

## 第14話ブロッコリーのご利用は計画的に

ルーシーはふと疑問に思ったことを口に出した。

「妖精語もあるの？」

「うん・・・」

「ある・・・」

「よー！」

「しゃべって」

「みるね」

「ファ」

「最後のやつにも言葉残してやれよ！『ファ』って言っちゃったよ

『ファ』って！」

「いや、妖精語だよ。」

「今のが妖精語？」

「うん。妖精語は俺らザコの領域内で使われるんだ。」

「ファファうおおファうおー！」

「どうしたブロッコリー」

「ブ、ブロッコリー、お前、神々をつかえる者しか話せないといわれる『妖精うお語』をしゃべっているんじゃない・・・」

ピカー！

突然、妖精ブロッコリーの頭が光った。

「ま・・・また『カナリウマブロッコリー』に・・・？」

「い、いや違う！ブロッコリーの頭はダイヤモンド並みに光ってる！」

「うおファファうおー！」

「ど、どうしたんだよブロッコリー！」

「うおファーーーーー！」

ボタン

「ブロッコリー！ー！！！」

## 第15話ブロッコリーの上にも3年

妖精ブロッコリーが突然倒れてしまった。

「ブロッコリー、ブロッコリー！」

ジョニーが何度呼びかけても返事がない。

「死ぬなよブロッコリー……せつかく友達になれたのに……立て！立って妖精界の王になれ！」

しーん……

「う……う……あの時……俺とお別れになっちゃって時……泣いてくれてありがとな……うつ……」

「返事がないくらいで死んだと思ってんじゃねーよ」

「え？ブロッコリー？」

「俺はそんなにヤワじゃない。……といっても立ちくらみして倒れたんだけどな」

「ブロッコリーのバカヤロー！バカブロ王！」

「バカブロ王言うな！」

「あれ？そういえば妖精ブロッコリー、『妖精うお語』じゃなくなってるよ？」

しーん……

「え、あたし変な事言った？」

「……本当だ！やったー！妖精うお語使えたのは嬉しいけどやっぱりジョニーと話せなきゃ嫌だもんな！」

「……」

「そっぴや、さっき俺が倒れた時に『友達』って言ってくれたよな？……ってどうしたジョニー？」

「だ……だって……ブロッコリー……人語使えるようになったから……妖精界に戻って……しまうんだろ？」

「アハハそうだな」

「もう会えないんだろ……そう思ったら……悲しくなってきた」

・・」

「バーカ

悲しいのは、お前だけじゃねーよ。俺も、ジヨニーと別れるの、すごい悲しい・・でも・・ジヨニーが俺の事『友達』って言ってくれただろ？俺はその言葉がとても嬉しかった。こんな俺でも俺を必要としてくれる人がいるって思ってた。」

「・・・それ、どういう意味？」

「俺、実はな・・・」



## 第16話ブロッコリーの過去

「俺、実はな…」

昔、ブロッコリーだったんだ。」

「いや今もブロッコリーだろうが」

「いや・・・ジョニーやルーシー達が食べるようなブロッコリーだよ。俺は秋田県の橋本農家でできたブロッコリーだった。そして、出荷されてスーパーに売られたんだ。でも・・・

『形が悪い』と、誰も買ってくれなかった・・・値下げされた値段でやっと買ってもらえたんだ。」

「それで食べられて妖精界に行ったとか？」

「いや、違う・・・っていうか、もう話すの面倒だから回想行きまゝす」

「ここまで話しといて回想かよ・・・」

妖精ブロッコリーは、値下げされた値段（50円）で佐久間さん家に買われた。

佐久間さん家の息子・麗一くんはジョニーと同じく野菜が大嫌いだった。

「麗一！ブロッコリー買ってきたわよ」

「えゝ！？何で!？」

「野菜食べないと大きくなれないわよ。」

「別にいいもん、大きくなれなくたって。」

と、言いつつ毎日牛乳をがぶ飲みする麗一くん。

妖精ブロッコリーは麗一くんに食べてもらえるのか・・・？

「最後の牛乳の余談、本編と関係ないよね!？」

## 第17話ブロッコリーより人参派

「今日はハンバーグよ」

「わーい！」

佐久間さん家は今日はハンバーグ。

妖精ブロッコリーと人参添え。

「ねえ、お母さん！ブロッコリーと人参食べなくていい？」

「だめよ！ちゃんと食べなさい！」

「つたく、この麗一って子嫌だわ。」

いきなり隣の人参が話し出した。

「それ、どういう意味？」

「私、3日前からここにいるんだけど・・・この子、野菜を食べないのよ。」

「へー・・・」

「だから、私達も食べてもらえないかもしれないわね・・・」  
と、その時・・・

「じゃあ、人参だけ食べるよ！ブロッコリーは残していい？」

そう言いながら、麗一くんは人参を箸でつまんだ。

「嘘・・・私・・・食べてもらえるの？やったー じゃあ、またね  
ブロッコリーさん。」

「あ、待って・・・」

「じゃあ、ブロッコリーは捨てちゃいましょう、安かったし。」

「え、え、捨てられちゃうの！？どうして？どうして？どうしてな  
んだ・・・」

回想終了

「気がついたら、俺は妖精界にいたわけだ。」

「ふーん。それが？」

「ジョニーが聞いてきたんだろうが！」

「いや、俺はブロッコリーの過去を聞いてんじゃなくて、ブロッコ

リーが言ってた『友達』がどーたらこーたらってことを聞いてんだ  
よ。」

「・・・つまり、俺らは離れても切れない絆で結ばれてる？ってこ  
とだよ！」

「その『？』は何ですかア！？」

## 第18話国民のブロッコリー騒動

「ね、ねえ。2人で話してないで私達も混ぜてよ。」

「おーいいぞ（ゴーン・・・ゴーン・・・）」

「何この鐘の音。」

「いや、携帯の着信音。ちょっと失礼。」

「あーもしもし?」

「ブロッコリーの携帯ってブロッコリー型・・・（笑）」

「そういえば、ブロッコリーの話に出てきた『麗ーくん』ってまさか・・・」

「えー!?今すぐ妖精界の王になれだど!?!」

「声でさえよ・・・」

「あ、ああ分かった。一回切るぞ・・・悪い、今すぐ妖精界に行くことになった。ここでお別れだ。」

「ええ!?!」

「何でそんな急に・・・」

「国民が何かと騒動を起こしているらしい・・・ってジョニーはどつした?」

「あれ?さっきまでここにいたよね。」

（俺の記憶が正しければ・・・）

レイイチくんは

野菜が嫌い。

## 第19話 イッツドミノ

レイイチくん。

日本からやってきた子。

野菜が大嫌い。

だから意気投合した。

「大根クソまずいよな!」

「あー、分かる!俺トマトも嫌い!」

レイイチくん・・・

お前は・・・

ブロッコリーヲ捨テタ人デスカ?

ジョニーは『佐久間』という表札を見つけてインターホンを押した。

「ハロー、つてジョニー!どうした?」

「レイイチくん・・・お前に会わせたい人(会わせたいブロッコリー)がいるんだけど・・・」

「それなら行くよ。ちよつと待つてて。」

しばらくするとレイイチくんが出てきた。

「走るぞ!」

「ちょ・・・待つてまだ靴ひもが・・・」

ジョニーはレイイチくんの靴ひもを踏んで、レイイチくんが転んでジョニーも転んでドミノ倒しのようになってしまった。

そこに通りがかった人が。

「オー!イッツドミノ!」

「テイクピクチャー!」

「無視しよう。早くしないとブロッコリーが・・・」

「ブロッコリー?どういうこと?」

「ブロッコリー!ルーシー!三妖精!」

「あ、ジョニーどこ行って・・・お、お前は・・・」

『麗くん』

## 最終話妖精ブロッコリーよ永久に

「お、お前は・・・」

（やっぱり・・・レイイチくんは・・・）

「きもつ。何このブロッコリー」

「・・・へ？」

「足とかついててきもいんですけど。これは夢？  
パンツ

「バカヤロー！」

「な、何すんだよジョニー。だってきもいだよ！」

「確かにこいつは・・・ブロッコリーはきもいよ！でも・・・こいつは俺を助けてくれた・・・野菜嫌いも克服できた・・・俺は！こいつのことを『親友』だと思ってる！」

「ジョニー・・・」

「レイイチくんは昔ブロッコリーを捨てちゃったんだ！覚えてないだろうけど。レイイチくんには捨てられた野菜達の気持ちなんて分からないだよ！」

「俺が・・・野菜を・・・捨て・・・うつ・・・」

「どうした」

「俺・・・日本にいたときはそんなこと気にせず捨ててた・・・でも、俺は捨てられていく野菜達が可哀想で・・・野菜は嫌いでもちゃんと残さず食べるようにしてるんだ・・・」

「そうだったのか！俺・・・何にも知らなくて。」

「ごめん・・・野菜達・・・」

「あのー、感動モノみたいな猿芝居やってる人達。俺そろそろ行かないと。」

「芝居じゃねーし！」

「行くって？」

「あ、妖精ブロッコリーは妖精界の王になるから妖精界に行くんだ

つて。」

「もうこっちは来ないのか？」

「ああ。」

「まあまあ、たまにこっちから会いに」

「行けば」

「いいじゃん！」

「そうか。その時は、俺も一緒に行っていいか？」

「もち。」

「じゃあ、行くわ。またな。ジョニー、ルーシー、三妖精、麗一。」

「パアアア・・・」

「消えた・・・？」

「行っちゃったか。」

「そういえばさー、ジョニー、ルーシーのこと好（わー！黙れ！b  
yジョニー」

「うん。知らなかったよ。私みたいなベジタリアンを好きになってくれる人がいたなんてさ。」

「あーあーあーあー」

「でも、ジョニーが私のこと好きって聞いて嬉しかった。ジョニーが好きだから。」

「あーあーあー・・・ってえー！？」

「なーんだ両想いかつまんねー」

「つまんないって何だよ！」

「まーまー、この話はハッピーエンドで終わらせようよー！」

「・・・分かったよ」

「ブロッコリー！元気か？」

「俺達両想いだぜ イエイ

んなわけで楽しくやってるんだよね」



・ ・ ・ ・ ・

俺達『親友』だからな！

「ったくいちいち手紙送んなよ」

「バカブロ王様国民が暴れ出しています」

「バカブロ王言うな！国民の名前は・ ・ ・ 『妖怪カリフラワー』？」

妖 怪 カ リ フ ラ ワ ー に 続 く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9694x/>

---

妖精ブロッコリー

2011年11月24日19時00分発行